

# 有題 無題

## 広がるSDGs

昨年12月に日本政府のSDGs推進本部から「第2回ジャパンSDGsアワード」の受賞団体が発表された。15の受賞団体のうち7団体による事例報告会が1月に都内で開催され、審査にあたった者としてコメントする機会に恵まれた。詳細は総理官邸や外務省のホームページを参照してもらいたい。報告会では大企業や全国組織だけでなく、中小企業や小さな地方自治体、小規模な国際協力NGOと幅広いアクターからSDGsへの取り組みが発表された。

コメンテーターの1人の言葉を借りると、SDGsはまさにオールマイティの「接着剤」。「SDGsを軸に、私たちの地域の課題を話し合ってみませんか」と投げ

### 国連広報センター所長 根本 かおる



ねもと・かおる 86年(昭61)東大法卒、同年テレビ朝日入社。米コロンビア大学大学院国際関係論修士修了。96年から国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)で難民支援活動に従事。世界食糧計画(WFP)広報官、国連UNHCR協会事務局長なども歴任。13年から現職。神戸市出身。

## 垣根越えたつながりの「接着剤」

かければ、立場や業界の垣根を越えて多くのアクターが集まり、このつながりから解が見えてくる。

内閣官房長官賞を受賞した鹿児島県の大崎町は、ゴミの埋め立て処分場の満杯が迫り、焼却炉の予算もなく、新たな処分場の用地の目途も立たないというピンチの中から、「混ぜればゴミ、分ければ資源」の考え方を住民に浸透。27品目分別の行政・企業・住民協働畜産飼料製造業をつな

型のリサイクル事業を実施してきた。ゴミ処理費の節約と同時に、リサイクル資源の売却も積極化。SDGsの採択の前から住民や企業を巻き込んだ対話が行われ、ピンチをチャンスに変えることに成功した。

最高賞の内閣総理大臣賞に輝いた日本フードエコーロジーセンターは、食品廃棄物処理とリキッド畜産飼料製造業をつな

けることを実現した。報告会で高橋巧一代表は、10歳の時に持続可能な社会への貢献について書いた作文が原点にあり、子どもの頃からやりたかったことを仕事にしていると述べた。

外務大臣賞のエイズ孤児支援「NGO・PLA S」は、エイズ孤児やHIV陽性のシングルマザーら最も取り残されやすい人々の教育、生計向上、ライフプランニングへの支援で、ウガンダと

ケニアの行政や支援団体と連携している。規模は小さいが、持続性を強く意識したモデルである。門田瑠衣子代表理事は「大学時代にアフリカでエイズ孤児と出会った者の責任として、行動に移さなければ」と大学生で団体を立ち上げた理由を語った。

当日は定員を超える300人以上が詰めかけ、3時間にわたる長丁場に最後まで付き合ってくれた。発表者の情熱が聴衆に伝播し、温度が高まっていくのを実感する会だった。こうした刺激から好事例が次々に生まれることを期待している。